

大江戸妖怪 おわら版④

～天空の竜宮城～

香月日輪



講談





講談社文庫

大江戸妖怪かわら版④

天空の竜宮城

香月日輪

講談社

【著者】香月日輪 和歌山県生まれ。「ワルガキ、幽霊にびびる！」（日本児童文学者協会新人賞受賞）で作家デビュー。「妖怪アパートの幽雅な日常①」で産経児童出版文化賞フジテレビ賞を受賞。他の作品に「地獄堂霊界通信」シリーズ、「ファンム・アレース」シリーズ、「大江戸妖怪かわら版」シリーズ、「下町不思議町物語」シリーズ、「僕とおじいちゃんと魔法の塔」シリーズなどがある。

◆香月日輪オンライン

<http://book-sp.kodansha.co.jp/topics/kouzuki/>

おお え どうようかい ばん てんくう けいどうじょう
大江戸妖怪かわら版④ 天空の竜宮城

こうづきひのわ
香月日輪

© Hinowa Kouzuki 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年8月12日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——株式会社廣済堂

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277902-9

目次

風にうそぶき、月をもてあそぶ

水鳥、桜さくらに舞う

薫風くんぷう吹きて、夏きた来る

天より落ち来る者あり

天空の竜宮にて

雀、神と会う

神守り、姿を現す

向こうにも荒神様こうじんさま

解説 三村美衣

『大江戸妖怪かわら版④』用語辞典！

191 185 170 151 130 100 75 49 23 9



講談社文庫

大江戸妖怪かわら版④

天空の竜宮城

香月日輪

講談社

目次

風にうそぶき、月をもてあそぶ

水鳥、桜さくらに舞う

薫風くんぷう吹きて、夏きた来る

天より落ち来る者あり

天空の竜宮にて

雀、神と会う

神守り、姿を現す

向こうにも荒神様こうしんさま

解説 三村美衣

『大江戸妖怪かわら版④』用語辞典！

191 185 170 151 130 100 75 49 23 9

大江戸妖怪かわら版④

天空の竜宮城

なんとのおう、いい陽気だわいエ。

コレサ、花見へでも出かけようじゃあないか。

春爛漫はるらんまんの大江戸おおえどは、見渡す限りの桜の海。あちらこちらの水辺の岸に花びらを舞い散らし、土手ではズラリと咲き競い、林や森では銀杏いちょうや松の枝にも薄紅うすべにの花びらが咲き乱れる。はて？

「やあ、今年は妖蝶ようちようの数が多いのう」

「ホンニ。松に桜とは、風流風流」

松の緑を飾る桜の花の妙を、愛でる側も鬼面おにづらと化け猫の異形いぎようの者。

でも、ここではそれが普通。

大江戸は大江戸でも、ここはまた別の世界。

魔都——、大江戸。

昼空を龍が飛び、夜空を大蝙蝠おおこうもりが飛び、隅田川には大蛟おおみずち、飛鳥山あすかやまには化け狐ぎつね、大江戸城には巨大な骸骨がいこつ“がしやどくろ”が棲む、妖怪都市である。

とはいえ、世は長らくの天下泰平。桜の花に化ける妖蝶も、鬼面や化け猫や、一ツ目や三ツ目の奇々怪々な住民たちも、いたって平和に暮らしている。

偽物もずいぶん混じつてはいるが、とにかく桜が咲き乱れ、陽気はいいし、風は彩なす桜真風さくらまじ。大江戸は本格的な花見の季節を迎えた。大江戸っ子たちは酒と肴さかなを山ほど抱え、一足のぼして飛鳥山なんぞへ桜見物に出かける。野掛け——である。

風にうそぶき、月をもてあそぶ

「ピクニックだ——っ！」

両手に弁当を持ってそう叫ぶのは、大首おおくびのかわら版屋の記者すずめ雀。

まだほんの少年のような顔をしてはいるが、それでも「大首のかわら版屋に雀あり」と言われる腕っこき。子どもだがキだと文句を言わせぬ仕事ぶりが評判である。

そして雀は、この妖怪だらけの世界にいるただ一人の、ただの人間。異界いがいより落ち来た者である。

ただの偶然か、はたまた何の神のいたずらか、まったく別の人生を歩むことになった雀は、たくさんの妖あやかしたちに助けられ、泣いたり笑ったりしながら季節を重ねてきた。

「春——……。春だ……」

花霞にけむる空を、雀は見上げる。

「ここに残ることを決めたのが、春だった」

今年もまた、そう思う。

忘れられない色がある。轟々ごうごうと舞い散る桜吹雪、天空の庵いおりの庭に射す光……初めて美しいと思った。それが、「お前が生きている証拠だ」と教えられた。今また花萌ゆる季節を迎え、桜の薄紅がいつそう胸に迫る思いの、雀三度目の春である。

その雀の肩を、銀色の毛の前足がポンと叩いた。

「天気はいいし、風は微風。出かけるには最高の日だね」

そう言いながらパイプの煙を吹かすのは、銀色猫のポー、雀の同僚。大首のかわ

ら版屋の文芸担当記者である。雀よりもちよつと低いぐらいの背丈。二足歩行の足元は革のブーツ。チェック柄のハンチング帽と揃いのチョッキを身に着け、パイプを吹かすこの化け猫は、どうやら「外地」からの「渡来人」らしい。とはいえ、雀には「外地」とはどこのことかまだわからない。雀にとつて、まだまだ大江戸は謎だらけだ。

謎といえ、雀とポールの横でうんうんとうなずいている白い塊。こちらこそ雀の同僚、絵師のキュー太。酒樽さかだるに白い布をかぶせたような真つ白けの身体からだに細い手。目と口にいたつては、雀がいたずらで描いたもの。ところがそんな口でもできたとなん、しゃべれるようになってしまった。それも言葉の書かれた細長い紙を口から吐くのである。キュー太がなんなのか、なぜそんなしゃべり方なのか、まったくわからない。

この面々の雇い主というのがまた複雑怪奇。真つ赤な首だけの大首の親方は、いつもかわら版屋の奥座敷の、一番奥の壁から現れる。壁一面の大きな顔、金色の燃えるような両目。どこからどう見ても、醬油で煮た煮卵にたまごに黒い手足を生やした「手下」を大勢従えて、雀たちをまとめて一呑みにしそうな口から雷鳴のような怒鳴り

声を上げる。雀など、何度吹き飛ばされそうになったことか。それでも雀にとっては、良き親代わりの一人に違いなかった。

親方はいないが「大首のかわら版屋ご一行様」、本日は連なつて野掛けに飛鳥山まで、ぶらりぶらりの道中である。かわら版屋の向かいのめし処^{どころ}「うき屋」で、特製の花見弁当も作ってもらつた。長火鉢も持つてゆくので、酒は熱燗^{あつくあん}、お茶は淹れ^いたてを楽しめる。

桜花ははらほると、妖蝶はひらひらと、春の陽射しの中を舞い踊る。桜並木に射し込む光も、桜色に染まっていた。

「なんて綺麗だ……」

雀は、思わずため息をつく。自分の頭にも、ポーの銀色の毛の上にも、そしてキユー太の真っ白の身体^{からだ}にも、桜の花びらが舞い落ちる。今日は長屋に帰ってから、きつと身体中から桜の香りがすることだろう。

「おいしい、ここだ、ここだあ」

大きな桜の下で、桜丸^{さくらまる}が雀たちに手を振っていた。桜の枝に幕を張り、花見の場

所取りをしていてくれたのだ。

桜丸は、赤い長い髪、白い肌。赤つぽい目をした、雀より少し年上の青年。雀のいい兄貴分である。いつも身に纏う白地に鮮やかな桜柄の着物が、今日はことのか華やかに見える。

「やあ、桜丸とはよく言つたもんだ。いつそ艶やかだねえ」

ポーが喉の奥でクツクと笑つた。雀も笑つた。

しかし、女のような美形に見えても、桜丸のその白い身体には、魔人の入れ墨が刻まれている。

「入れ墨」は、「魔人」の証。鬼道すなわち妖術を使う魔人は、大江戸つ子にとつても不思議な存在だ。時に尊敬され、時に恐れられ、大江戸城の要職に就いているかと思えば、町中をただフラフラしていたりする。

桜丸は、まさに後者。いつも何をしているのかわからない。見かける時は、酒を呑んでいるか、的場で遊んでいるかのどちらかだった。また、その呼び名を「風の桜丸」といい、跳ねるように空を飛ぶことでも知られていた。

「場所取り、ありがとうよ、桜丸」